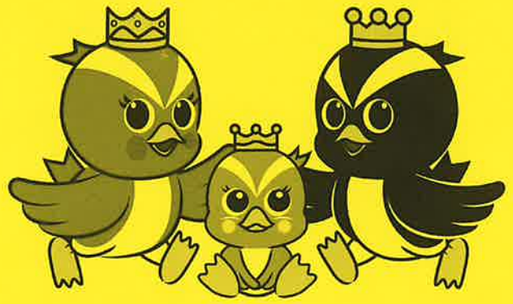
令和４年度

門川町立小・中学校児童生徒
第四十回読書感想文コンクール
入選作品集

門川町教育委員会



まえがき

依然、収束が見えない新型コロナウイルスによる数々の制約が続く中、学校には、安心してのびのびと学習に取り組む児童生徒の姿があります。これは、ひとえに、先生方の感染症対策への不断の努力と、保護者や地域の皆様のご協力の賜であると思い、心から感謝しております。

このような状況の中、今年も、第四十回「読書感想文コンクール」が実施できたことを嬉しく思います。

さて、今回は町内の児童生徒から、昨年度の応募を約二百も上回る、一〇八四点という多数の応募がありました。このことは、学校と家庭による読書活動の推進の成果であり、より多くの児童生徒に素晴らしい本と出会いをつくる機会となったと実感しております。

本紙においては、応募作品の中から、審査によって入選した児童生徒の作品をご紹介します。児童生徒がテーマにした内容をいくつか紹介しますと、「家族愛」「友達への思いやり」「日常の幸せ」「友情」「社会貢献」「命の尊さ」「平和への願い」「子どもの人権」「いじめ問題」「自尊心」等、まさに現代社会が直面する問題を取り上げている作品が多く、本に描かれた世界や登場人物の言動を、自分の生き方と照らし合わせ、今までの自分、これからの時代を生き抜く自分について、とても豊かに表現できており、大変感動しました。

これから、季節が秋から冬へと向かいます。夕暮れ時が刻々と早まるこの時期は、読書を楽しむにはとてもよい季節と言われます。本の中では世界中を自由に駆け回ったり、たくさんの人々と出会い、色々な生き方や考え方に触れたりすることができます。この時期に、できれば家族でたくさんの本に触れ、本についての会話をしてみてはいかがでしょうか。

なお、門川町には、各学校の図書担当の先生方が中心となって選んだ「門川の子どもたちに読ませたい図書百冊」（バージョンⅠ・Ⅱ、全二百冊）もありますので、先生方お薦めのたくさんの本を手に取って、一冊でも多くの本との出会いを楽しんでもらいたいと思います。

結びに、「読書感想文コンクール」の実施に当たり、児童生徒への指導並びに審査等のご協力をいただきました各学校の先生方、保護者の皆様、関係者の皆様に厚くお礼を申し上げます。

令和四年十月

門川町教育委員会　教育長　新原　とも子

読書感想文発表会のうつりかわり…

回数	年　月　日	名　　称	参加者数	対　象　者	備　考
1	59. 1.下旬	童話発表会	16	門小児童	
2	60. 1.27	童話発表会	26	門小・五十鈴小児童	
3	61. 2. 2	童話発表会	29	門小・五十鈴小・草小児童	
4	62. 1.25	童話発表会	38	町内全小学生	
5	63. 2. 7	童話発表会	37	町内全小学生	
6	元. 2.19	童話発表会	36	町内全小学生	
7	2. 2. 4	童話発表会	37	町内全小学生	
8	3. 2. 3	童話発表会	37	町内全小学生	
9	4. 2. 9	童話発表会	36	町内全小学生	
10	5. 2.14	童話発表会	34	町内全小学生	
11	6. 2.20	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数199 24	町内全小・中学生 入選者	総合評価
12	6.10.30	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数222 16	町内全小・中学生 入選者	総合評価
13	7.10.29	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数122 18	町内全小・中学生 入選者	総合評価
14	8.10.27	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数137 18	町内全小・中学生 入選者	作文評価
15	9.10.19	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数151 19	町内全小・中学生 入選者	作文評価
16	10.10.25	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数152 18	町内全小・中学生 入選者	作文評価
17	11.10.24	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数139 18	町内全小・中学生 入選者	作文評価
18	12.10.22	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数124 17	町内全小・中学生 入選者	作文評価
19	13.10.28	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数117 18	町内全小・中学生 入選者	作文評価
20	14.10.20	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数109 18	町内全小・中学生 入選者	作文評価
21	15.10.25	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数141 9	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
22	16.10.23	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数150 9	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
23	17.10.22	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数135 9	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
24	18.10.21	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数122 9	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
25	19.10.27	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数119 9	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
26	20.10.25	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数80 9	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
27	21.11.14	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数84 8	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
28	22.10.16	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数78 8	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
29	23.10.22	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数77 8	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
30	24.10.20	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数78 8	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
31	25.10.19	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数65 8	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
32	26.10.18	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数59 8	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
33	27.10.17	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数54 9	町内全小・中学生 町制施行80周年記念特別賞・ 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
34	28.10.15	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数55 8	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
35	29.10.21	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数47 8	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
36	30.10.20	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数53 8	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
37	元.10.19	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数55 8	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
38	2.10.17	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数48 8	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
39	3.10.16	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数50 8	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
40	4.10.15	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数44 4	町内全小・中学生 最優秀賞受賞者	作文評価

もくじ

まえがき …… 1

読書感想文発表会のうつりかわり …… 2

小学校低学年の部

最優秀賞　大すきなばあば　草川小学校　二年　請関　瑚夏 …… 6

優秀賞　いのちをいただく　草川小学校　一年　土井　柑奈 …… 7

優良賞　わたしが気になった本　草川小学校　二年　福永　望叶 …… 8

優良賞　ぼくがラーメンたべてるとき　五十鈴小学校　二年　松本　瑛奈 …… 9

小学校中学年の部

最優秀賞　「こどもSDGs」を読んで　門川小学校　三年　黒木　恋華 …… 11

優秀賞　ぼくにもその時がくる　門川小学校　四年　長谷川　晴一 …… 12

優良賞　「ココロ屋」を読んで　門川小学校　四年　小田　莉愛奈 …… 14

優良賞　「ひろしまのピカ」を読んで　五十鈴小学校　四年　黒木　愛 …… 15

小学校高学年の部

最優秀賞　私にできること　門川小学校　六年　川崎　結衣叶　17
優秀賞　いじめについて考える　五十鈴小学校　六年　鈴木　凛子　18
優良賞　人と人の関わり　門川小学校　五年　宮原　優心　20
優良賞　正しくうったえるために　門川小学校　六年　河野　季桜　21

中学校の部

最優秀賞　命のリレー　門川中学校　一年　橋口　空翔　24
優秀賞　もう一歩、信じる道へ　門川中学校　一年　神戸　月渚　26
優良賞　私達の生きる権利　門川中学校　三年　時任　愛菜　27
優良賞　心が変われば行動が変わる　門川中学校　一年　牧田　栞奈　29

読書感想文コンクール佳作受賞者一覧　……31

読書感想文コンクール審査委員一覧　……31

あとがき　……32

小学校の部

低学年

中学年

高学年

小学校低学年の部　最優秀賞

大すきなばあば

草川小学校　二年　請関（うけぜき）　瑚夏（こなつ）

わたしのばあばは、いつもえがおでまい日元気いっぱいです。

図書かんで、「ばあばにえがおをとどけてあげる」というだいめいを見て、わたしのばあばにも、もっとえがおになってもらう方ほうが見つかるかもしれないと思い、この本を読んでみることにしました。

ファーンは、ばあばのえがおが大すきでした。だけど、このごろばあばは、元気がありません。いつもえがおだったばあばは、わらわなくなりました。ファーンのママは、「じんせいからよろこびがきえちゃったみたい。」と言いました。ファーンは、ばあばのえがおをとりもどすために「よろこび」をさがしに行くことにしました。

もし、わたしのばあばがわらわなくなったら、わたしもファーンみたいに「よろこび」をさがしに行きます。わたしはばあばの「よろこび」はなんだろうと考えてみました。わたしのばあばは、おりょうりが大すきです。いつもおいしいおりょうりをつくってくれます。それをたべるわたしは、えがおになります。そのえがおを見たばあばも、えがおになります。ほかにも、わたしのばあばは、貝ほりやみなとりがすきです。

とってきた貝をわたしに見せてくれるときのばあばは、はじけるようなえがおです。そんなえがおのばあばを見ると、わたしもえがおになります。

ファーンは、公園でたくさんの「よろこび」を見つけたけれど、つかまえることができませんでした。かなしい気もちでばあばのいえに行って、その日のできごとをぜんぶばあばに話しました。するとばあばは、とびきりのえがおを見せてくれました。ばあばは、「あなたがだいてくれるだけで、せかいじゅうのよろこびをもらったきぶんよ。」と言いました。なにかとくべつなものをあげなくても、ばあばをえがおにする方ほうは、あるんだなと思いました。

わたしはばあばが大すきです。ばあばがえがおでいてくれるためには、わたしがえがおでいることが大切なのではないかと思いました。わたしもファーンみたいに、わたしのえがおをばあばにずっととどけていきたいと思います。

小学校低学年の部　優秀賞

いのちをいただく

草川小学校　一年　土井（どい）　柑奈（かんな）

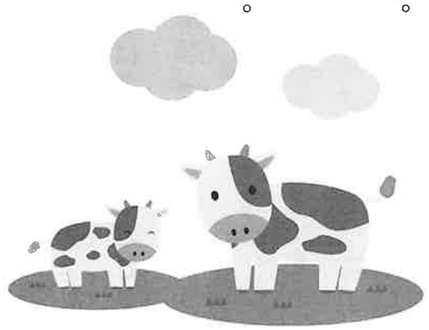
「じっとしとけよ、みいちゃん、じっとしとけよ。」みいちゃんはちっともうごきません。そのとき、みいちゃんの大きな目から、なみだがこぼれおちてきました。わたしは、うしがなくのをはじめてしりました。「こわかったね。」「くるしかったね。」みいちゃんが、かわいそうだとおもいました。

さかもとさんのしごとは、うしのいのちをといて、おにくにすることです。さかもとさんのこどものしのぶくんは、そんなおとうさんのしごとがはずかしいとおもっていました。さかもとさんもうしのいのちをとくとき、うしと目があうたび、「いつかやめよう。いつかやめよう。」とおもっていました。わたしもしのぶくんとおなじで、もしおとうさんがさかもとさんとおなじしごとだったらいやです。それはうしのいのちをとくしごとだからです。でもこの

本をよんでみてわかったことがあります。さかもとさんもみいちゃんのいのちをとくとき、みいちゃんとおなじくらいこころの中でつらくてないていたとおもいます。

わたしはおにくが大すきです。うしをとく人がいなかったら、だれもうしのおにくはたべられません。さかもとさんたちのように、たいせつなしごとをしてくれる人、みいちゃんのようにわたしたちにおいしいおにくをたべてもらうためにうまれてくるうしさんにかんしゃしたいです。これからも「いただきます。」「ごちそうさま。」といのちをいただくことにかんしゃして、のこさずたのしくたべたいです。

うまれてくれてありがとう。
そだててくれてありがとう。
さかもとさん、おしごとを
やめないでくれてありがとう。
しあわせなきもちになり
ました。



小学校低学年の部　優良賞

わたしが気になった本

草川小学校　二年　福永（ふくなが）　望叶（ののか）

わたしは、「だんごむしになったぼく」という本を読みました。だい名と絵を見ると、小学生が親子で絵とお話を考えてかいた本で、おもしろそうだと思って読んでみました。

この本には、だいちゃんとお兄ちゃんと、ダンゴムシが出てきます。お兄ちゃんが、あさ目をさますとダンゴムシになっていて、だいちゃんになげられたり、バケツの中へおとされたり、足でふまれたりします。そのうち、目がさめて、今までのことがぜんぶゆめだった、というお話です。

本の中で、気になったところは、ダンゴムシはなぜなげられると丸くなるのかということです。しらべてみると、ダンゴムシは歩くのがおそいから、体を丸くしてかたくなることによって、てきにたべられないようにしているそうです。

もう一つ気になったことは、なぜ水がとくいなのかです。それは、水からでも空気からでもさんそをとり入れられるというとくべつなこきゅうをしているからだそうです。

ほかにも、ダンゴムシは、のどがかわくとたいりょうの水をとるためにおしりから水をのむそうです。わたしが知らないことばかりで、びっくりしました。

この本のさいごは、ダンゴムシのことが大すきなお兄ちゃんが、やさしくやさしくして、ダンゴムシとお友だちになりました。お兄ちゃんは、ゆめに出てくるほど、ダンゴムシがすきなんだなあと思いました。

この本を読んで、わたしも、見たゆめで絵本をつくってみたいなと思いました。絵も文字も手書きでとても読みやすかったです。お兄ちゃんがダンゴムシにやさしくして、お友だちになったように、わたしもお友だちやまわりの人、そして、生きものたちにやさしくしていきたいと思います。

小学校低学年の部　優良賞

ぼくがラーメンたべてるとき

五十鈴小　二年　松本（まつもと）　瑛奈（えな）

「またあしたね。」

わたしは、学校からのかえりみち、いつも同じばしょでお友だちにさようならをします。

家についたら、今日のたのしかったことやうれしかったこと、それからかなしかったことをかぞくと話しながら、あたたかいごはんをたべます。それがわたしの「あたり前」のまい日です。

おかあさんは、わたしがごはんをのこしてしまったとき、「せかいには、ごはんをおなかいっぱいにたべられない子どももいるんだよ。おなかいっぱいになることは、しあわせなことだよ。」と言います。

今までは、ごはんをたべられない子どもがいるなんて考えたことがなかったけど、図書かんで「ぼくがラーメンたべてるとき」という本を読んで、少しだけ考えてみました。

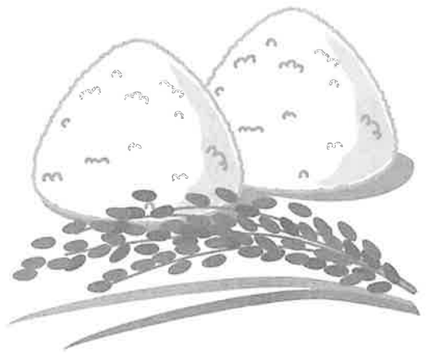
この本を読んでみると、ほかの国は、わたしのあたり前とぜんぜんちがうということが書いてありました。

ぼくがラーメンをたべてるとき、となりの国の女の子は、赤ちゃんをおんぶしていました。そのとなりの国の女の子は、いどから水をくんでいたり、そのまたとなりの国では、すなの中で男の子がたおれていました。

わたしは、このばめんが一ばん心にのこりました。男の子がたおれているりゆうは書かれてなかったけれど、きっと、わたしのおかあさんが言っていたみたいに、ごはんがたべられなくておなかがぺこぺこだったのかもしれないなと思いました。

この本を読んで、ごはんをたべたりべんきょうをしたりできるまい日は、とおい国の子どもたちにとって「あたり前」ではないことが分かりました。

テレビでウクライナでせんそうをしていることを知りました。わたしにはまだむずかしくて分からないけど、せかいがへいわになって、みんながわらってすごせることが「あたり前」になったらいいなと思います。これからは、わたしも、「あたり前」のまい日を大切にしていきたいです。



小学校中学年の部　最優秀賞

「こどもＳＤＧｓ」を読んで

門川小学校　三年　黒木（くろき）　恋華（れんげ）

「ＳＤＧｓってなんだろう。」

さい近よくテレビで見聞きするこの言葉が私はとても気になっていました。そこで「こどもＳＤＧｓ」なら、私でもＳＤＧｓが何なのか、分かるかもしれないと思い、読むことにしたのです。

ＳＤＧｓとは、「二〇三〇年までにたっせいを目指す、世界きょう通の十七の目ひょうで、持ぞくかのうな開発目ひょう」と書かれていました。むずかしいなと思いました。

どうしてＳＤＧｓにとり組まないといけないのでしょうか。その理由も、はっきりと本の中から見つけることができました。このまま人間が、りえきだけを考えて、かんきょうはかいをつづけると、しょう来、自ぜんのめぐみをえることができなくなるそうです。

たとえば、日本から見て地球のうらがわにあるアマゾンのねったい雨林は「地球のはい」といわれ、地球の空気をきれいにしてくれていますが、開発がすすんで、どんどん木が切られています。私たち、日本人からしてみれば地球のうらがわのことですが、同じ「地球に住んでいる人間」と考えれば、た人事ではありません。ＳＤＧｓは、私たち人間と地球をまもるためにとり組み、たっせいしなければいけないことなんだと思いました。

私のお母さんは、お仕事の時に、カラフルなバッチを服につけています。かわいいなと思っていたら、ＳＤＧｓのバッチでした。ＳＤＧｓには、十七の目ひょうがありますが、目ひょう五に、「ジェンダー平どうをたっせいし、すべての女せいおよび、女じのエンパワーメントを行う」とあります。世界では、女の子というだけで、学校に行かせてもらえなかったり、仕事で男の人より出世しにくかったりするそうです。

お母さんのはたらいている会社では、男女さをなくすために、女せいのかん理しょくをせっきょくて

きにさい用しているそうで、私のお母さんもその一人です。男だから女だからとか、そういうのはとてもふるいと思います。

この「こどもＳＤＧｓ」を読んで、かんきょうの問題やさべつの問題、生活のことなど、色いろなことにつながっているのだと強く実感することができた気がします。

子どもの私にできるＳＤＧｓがたくさんあることも、この本を読んで学ぶことができました。見ていないテレビをけす、おふろでシャワーを出しっぱなしにしない、ごはんをのこさず食べることもそうです。学校でいじめやさべつがあったなら、それに対して声をあげることも、今の私にできるＳＤＧｓなんだと気づかされました。

ＳＤＧｓにかんけいのない人なんてこの世にだれ一人いません。むずかしそうなことだと思っていましたが、本を読んで、自分にもできるとり組みがあることが分かったので、どんどんじっ行し、友だちにも教えてあげたいと思いました。世界の未来は、自分の未来です。大事にしていきたいです。

小学校中学年の部　優秀賞

ぼくにもその時がくる

門川小学校　四年　長谷川（はせがわ）　晴一（せいいち）

ぼくには、苦手な食べ物があります。主人公のたくま君にも、苦手な物があって、給食でなすが出る日は、おなかがいたくなって、学校に行きたくなくなります。ぼくと少しにているなと思いました。

この本の主人公、一年生のたくま君は、なすがきらいです。なすのぐじゅぐじゅしていて、苦い味がするところがきらいだそうです。

たくま君は、夏休み、おじいちゃん、おばあちゃんの家に、一週間、おとまりすることになりました。おじいちゃんは、なすやピーマンなど、野菜をたくさん育てていました。夜ごはんに、なすのおみそしるが出たとき、たくま君のお母さんが、たくま君におみそしるを食べさせようとしました。その時、おじいちゃんが、「そんなことしたらよけいにきらいになるだろう。いつかきっと、その時がくるから、むりに食べさせちゃいかん。」と言ったので、たくま君が聞きました。

「その時って。」するとおじいちゃんが、「おいしく食べられる時だよ。今はきらいでも、おいしく思える時がくるものさ。」と、言いました。

最後の日、たくま君はおじいちゃんと川に行きました。川岸でおやつを食べている時、おじいちゃんが、「じいちゃんも、昔、なすがきらいでなあ。」と、はずかしそうに、ぼそっと言いました。たくま君はおどろきました。

おじいちゃんは、おばあちゃんとけっこんして、いろいろななす料理を作ってもらって食べているうちに、いつのまにかなすが好きになったそうです。

その話を聞いてたくま君は、おじいちゃんにもその時が来たのなら、ぼくにもその時が、いつか来るのだと安心しました。最後の夜ごはんは肉に野菜をまいた肉まきで、たくま君もお手伝いをして作りました。

ぼくもなす、ピーマン、おくらがきらいです。でも、本の絵を見ておいしそうだなと思ったので、おばあちゃんが庭で育てたピーマン、おくらと、買ってきたなすやにんじんを肉まきにして食べてみました。すると、意外においしくて、苦くもなかったのでまた食べたいなと思いました。

たくま君も、なすをまいた肉まきを一口食べることができました。そしておじいちゃんが、「その時が一歩近づいたということだよ。」と言いました。ぼくはこの場面が一番心にのこりました。ぼくも肉まきを食べることができたので、ぼくの「その時」も近づいてきたのだと思います。

この本を読んで、ぼくも苦手な食べ物を少しずつチャレンジして食べられるようになりたいと思いました。

「その時がくるくる。」

小学校中学年の部　優良賞

「ココロ屋」を読んで

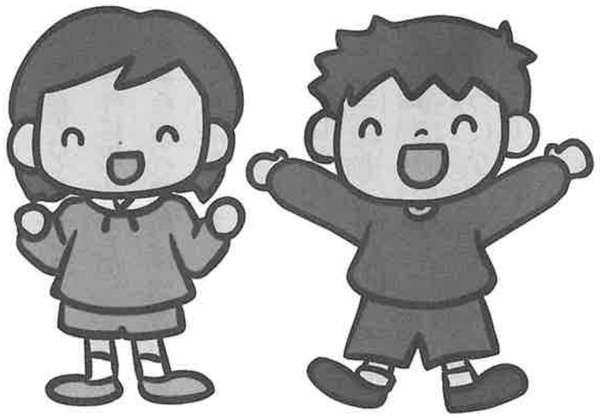
門川小学校　四年　小田（おだ）　莉愛奈（りあな）

この本を読もうと思った理由は、「ココロ屋」というお店の名前を聞いた事もないし、見た事もなかったのでどんなお店なのか気になったのでこの本を選びました。

この本は、主人公、ぼく（ひろき）が学校で先生に「ココロをいれかえなさい。」とおこられるところから始まります。先生におこられた後、ひろきには、学校のろうかでココ、ココロ、コロココロ、ココロ、ココココというかわいらしい音が聞こえてきました。その音が鳴った方向に「ココロ屋」はありました。ひろきは「ここなら、ココロをいれかえてだれからも好きになってもらえるかもしれない」と思い、いろいろなココロと自分のココロを入れかえていきます。しかし、「やさしい心」は、みんなにやさしくしすぎて、ひろきのまわりにだれもいなくなってしまい、ひろきは「やさしい心」にふ安を感じてしまいます。また、「す直な心」は自分の気持ちをす直に話しすぎて、みんなをおこらせてしまいます。

わたしが、心にのこった場面は、ひろきがす直な心ややさしい心などではなく、「自分の心」をもどしてほしいとおねがいした場面です。その理由は、最初は、自分の心をとりかえればみんなから好きになってもらえると思っていたひろきが、最後には、自分の心は思っていたほどダメじゃないと気づいたからです。ひろきが自分の心には、「ゆうかんな心」「くじけた心」「せっかちな心」「強い心」「やさしい心」「す直な心」「あたたかい心」があり、天ねんもののすばらしい心でかのうせいにみちみちしているのを知り、みんなに好きになってもらえるように育てていきたいと考え直した所もとても心にのこりました。わたしがひろきでも、同じように自分の心を選んだと思います。

こんなふうにたくさんの心がまじっていたら、ひろきと同じように、この心が一番いいなと思うからです。



この先どんなことがあっても、わたしは、自分の心はダメだと思うのではなく、ひろきと同じように、自分の心が一番だと考え直していきたいと思います。

そして自分の心を少しずつ育てていきたいです。

小学校中学年の部　優良賞

「ひろしまのピカ」を読んで

五十鈴小学校　四年　黒木（くろき）　愛（まな）

わたしは、「ひろしまのピカ」というお話を読みました。選んだ理由は、最初、本の題名がおもしろそうだと思ったからです。そのあと表紙の絵を見たときに、これは一体何の話だろうととても気になったので読んでみることにしました。

このお話は、一九四五年八月六日午前八時十五分、広島に原子ばくだんが落とされた場面から始まります。女の子が家族とごはんを食べているとき、とつ然ピカッとおそろしい光がつきぬけました。女の子が気が付いたときには、あたりは真っ暗で、むこうには赤いほのおが立ち上がっていました。川には、水を求めてゆうれいのようにさまよっている人や、体の皮がむけてたれ下がっている人、力つきてたおれている人たちがたくさんいました。

わたしがこのお話を読んでまず思ったことは、最

初にこの本を見て感じたことと全くちがっていました。

本を読んでいくにつれて、とてもこわくなりました。そしてこれが本当にあった話だと知って、昔の広島の人たちがとてもかわいそうに思えました。

原子ばくだんは一発でしたが、広島はいっしゅんで見わたすかぎりのやけ野原になりました。数えきれないほど人が死に、何年もたっているのに、病気になって次々と死んでいきました。

女の子のお父さんも病気になり、血をはいて死んでしまいました。女の子も命は助かりましたが、原子ばくだんのせいで、いくつになってもちっとも大きくなりませんでした。

わたしはそのときの女の子の気持ちを想像して、とてもむねが苦しくなりました。

わたしは今、当たり前のように学校に行って勉強をしたり、友達と遊んだり、家族とごはんを食べたりしています。しかし、昔と今をくらべると、それが当たり前ではないことに気付きました。今までそんなことを考えたこともありませんでしたが、この本を読んだら、毎日がとても幸せなのだと思いました。もうこれから先、こんな悲しいことがあってほしくありません。

八月六日が来ると、毎年広島ではとうろう流しが行われています。川に流すとうろうには、平和への願いがこめられているそうです。わたしは、これから八月六日のことは絶対にわすれません。

今、世界ではロシアとウクライナが戦争をしています。このお話のように、たくさんの人びとがなくなっているそうです。他の国でも、戦争によって悲しんでいる人たちがたくさんいると思います。もう二度と原子ばくだんが落とされないように願っています。

これから、ロシアやウクライナ、世界中の国ぐにがなか良く平和な世の中になってほしいです。

小学校高学年の部　最優秀賞

私にできること

門川小学校　六年　川崎（かわさき）　結衣叶（ゆいか）

しょうげきを受けたのは数年前のことです。

私は、お母さんと妹の病院受診に付きそっていました。待ち合い室に座っていると、目の前を十歳くらいの女の子が通りました。その女の子は地肌が見えるくらいうすい髪で、点滴をしながらかん護師さんと一緒に歩いていました。私はおどろいてお母さんに、「女の子は何の病気なの。」と聞きました。すると、お母さんは、「白血病か小児ガンかなあ。」と言いました。子どもでも、そんな病気になるのかと私はとてもおどろきました。

この本に出てくる美空ちゃんの髪の毛は腰にとどきそうなくらい長くて、つやつやしています。だけど、髪の毛の量が多いので、毎日、シャンプーするのが大変。かわかすのは、もっともっと大変です。自分一人でできないので、いつも、お母さんに手伝ってもらいます。私は美空ちゃんの大変さがよく分かります。私もダンスをしていたので、ずっと髪の毛をのばしていました。

美空ちゃんは、あるおばあちゃんとの出会いで、「ヘアドネーション」という言葉を知りました。ヘアドネーションとは、髪の毛の寄付だということ。髪の毛を寄付をすることにより、白血病や小児ガンの治療で髪の毛がぬけたり、無毛症で生まれつき髪や眉毛がない子どもたちに医療用ウィッグを作り届けてあげることができることを知り、幼稚園から小学校四年生までずっとのばし続けてきた髪を切る決心をしました。私は美空ちゃんの勇気ある行動に強く心をうたれ、私も、妹の病院受診で見かけた女の子を思い出して、少しでも役に立てればと思い、ヘアドネーションすることを決めました。寄付できる髪の長さは、三十一センチ以上と書いてありました。

数週間後、私は美容院へ行き、何年ものばし腰まであった髪を五本に分けて束ねてもらい、四十センチ切りました。切ってすぐは、少しさびしい気持ちでしたが、その反面、私の髪の毛がだれかのために役立ってくれると思ったら、髪の毛を切って良かったなあと心から思いました。

本に、一つのウィッグを作るには二十～三十人の髪の毛が必要で、たくさんの費用がかかり、髪の毛の束をたくさん集めただけでは、作れないということ。また世界にたった一つの病気の子どもにピッタリ合うウィッグが完成するためには、何十人もの職人が関わり、そのバトンをつなぐことで、子ども達のもとへわたっていく。ヘアドネーションに関わる人は、だれもが「子どもたちのため」というほこりをもってそのバトンをつないでいると書いてありました。

私はこの本に出会えたことで、ヘアドネーションを経験し、人と人とのつながりの大切さを知ることができました。

ヘアドネーションは、けん血とちがって年れいや性別に関係なく、子どもでもできるボランティアです。今でも多くの子どもたちが「ウィッグ」を必要としています。そんな子どもたちがこれからも私たちと同じように笑って過ごせる毎日であるといいなと思っています。

小学校高学年の部　優秀賞

いじめについて考える

五十鈴小学校　六年　鈴木（すずき）　凛子（りんこ）

私が読んだ本は、「ぼくらが作ったいじめの映画」です。図書室でこの本の題名を見たとき、子どもがどのようにして映画を作るのだろうと疑問に思い、この本を選びました。

群馬県の大胡小学校にある映画クラブでは、一年をかけて子ども達が映画を作る活動をしています。

私は、そんなクラブがあることがうらやましいと思いました。私が映画クラブだったら、映画を観た人が楽しくなるような友情をテーマにするか、私の好きなミステリー映画を作ってみたいと思います。でも、この年の映画クラブの子ども達は、いじめをテーマに映画を作っていました。まず、「いじめ」という言葉の印象が悪いので、私ならいじめはテーマに選びません。映画クラブの中にも、私と同じようにいじめの映画に反対する人もいました。しかし、いじめの映画に反対していた人も、映画の内容を考えると、次々にアイデアが浮かんでいました。どのアイデアも、実際に起こりそうないじめの内容ばかりで、私はとてもいやな気持ちになりました。特に、いやだと感じた演出は、ろうかで友達に足をかけて「貧乏、貧乏。」とはやし立てるところです。私はこの演出にドキッとしました。

なぜなら、私はいじめられたことはないけれど、同じようにいじめられている友達を目撃したことがあるからです。私は、小学校三年生のとき、一年間だけ県外の学校に転校した経験があります。その学校では、友達が描いた絵をからかったり、陰で悪口を言ったりするいじめがありました。私が、いじめられている友達と話をしようとすると、じゃまをする友達もいました。いじめている友達をかばうと、自分までいじめの影響を受けてしまいそうで、その時、いじめを止めさせることができませんでした。今も、あの時のことを思い出すと、どうして何もしてあげれなかったのだろうと、モヤモヤして悔しくなります。

映画の最後には、いじめられて自殺をしようとするナツキを見て、いじめたシオリだけでなく、他の友達もいじめたことを反省し、みんなが仲良くなりました。でも、映画ではなくて本当のいじめだったら、自分から死んでしまう人がいるのだと思うと、とても心がいたく感じました。

私は、この本を読んで、真剣にいじめについて考えました。映画の中のいじめは、本当のいじめではありません。でも、演技でもいじめたりいじめられたりすると悩むのだから、本当にいじめられている人は、想像もできないくらい苦しい思いをしているのだと思いました。いじめは本当にやってはいけない行動です。私は、いじめが起きないように、友達の中身をしっかりと見ることが出来る人になりたいです。

そして、もしも自分の周りでいじめが起こったら、いじめに立ち向かえるような強くて、勇気のある心をもちたいです。そして、いつかいじめがない社会を作る人になれるように、自分にできることを考えて生きていきたいです。

小学校高学年の部　優良賞

人と人との関わり

門川小学校　五年　宮原（みやはら）　優心（ゆみ）

わたしは、「パンプキン」という本を読みました。この本を選んだのは、この本の題名「パンプキン」の意味を知りたくなったからです。

この本は、大阪人のヒロカが主人公の物語です。ヒロカは、五年生の食べるのが大好きな女の子です。ヒロカは、東京から来たいとこのたくみのことがきらいでした。けれど、たくみが調べていた「パンプキン原爆」に興味をもち、たくみに教えてもらうことになります。そのことをきっかけに、ヒロカとたくみは少しだけ仲良くなれたという物語です。

わたしがこの本を読んで心に残ったことは、ヒロカが戦争をしたり爆弾を落としたりしたアメリカや日本に、うちのめされているところです。わたしは、この部分を読んで、こんな話を聞かされたヒロカは悲しかっただろうなと思いました。

なぜなら、もしわたしがヒロカと同じことを聞かされたと考えると、戦争なんて世界中どこでもやらないでほしいなと思うからです。こんなにも大ぜいの人が悲しむようなことをしないでほしいと思うからです。

この物語を読んで考えさせられたのは、パンプキン爆弾のような練習用のものでも落とされた側の気持ちはどうなのだろうということです。きっと、練習用だからしょうがないと思った人はいないでしょう。悲しかったりつらかったりするはずです。家族やペットが死んでしまってうれしいと思う人がいるのでしょうか。ただのケンカでも、こんな風に悲しかったりするはずです。わたしも、ケンカをして楽しいと思ったことは一度もありません。アメリカから原子爆弾を落とされた日本ですが、今ではアメリカと仲良くしています。こんなこと、一生起こらないでほしいとどちらも思っているからこそ、日本とアメリカは仲が良いのだとわたしは思いました。

わたしはこの本から、みんなに優しくするには、人と人との関わりが大切だと考えました。たくみと共に、パンプキン爆弾について調べていった様子、最後には二人とも仲良くしている様子からもよく伝わってきました。

これから、わたしはみんなと楽しくくらせるように、戦争がないことを願っていきたいです。みんなに優しく接することで、みんなの幸せは続いていくと思います。昔、アメリカが日本に爆弾を落としたとき、よろこんだ人たちがいるそうです。それは、日本から統治された、中国や韓国の原爆を落とした人々です。アメリカだけが悪いのでは無く、戦争をした日本も悪かったのです。一方的にアメリカが悪いとせめ続けるのではなく、日本もアメリカと同じだということをわすれないようにしておきたいです。

今、ロシアとウクライナは戦争をしています。もしかしたら、ロシアだけじゃなく、他の国も戦争を始め、日本もそうなってしまうかもしれません。そう考えたら、戦争はこわいなと思います。もし戦争が始まれば、人がたくさん死んでしまって、つらいことになるということを知っておけば、戦争をしようとする国もへっていくかもしれません。みんなが戦いはしないと思えるような人になってくれればいいなと思います。

小学校高学年の部　優良賞

正しくうったえるために

門川小学校　六年　河野（かわの）　季桜（りお）

「武器」は戦争に関係しているのか、一冊の本がほしいとはどういうことなのか。最近ニュースなどで、戦争、核兵器、死人、けが人など悲しい言葉を耳にします。この言葉を聞くたびに私は何ともいえない気持ちになります。

主人公のマララ・ユスフザイは、ある日突然少年に銃撃されました。もし、私がマララだったら、「ここにマララはいません。」と言ったと思います。なぜマララは逃げずに撃たれたのか、ここではうそをついてでも生きる選択をするべきだったのではと思います。私はマララが言った「大丈夫よ。みんなで心を合わせたらきっと乗りこえられるわ」という言葉が印象的でした。どんな状況でも、自分の信念をもち、周りの不安を勇気や元気に変えるマララの強さを感じました。

武器を持ち攻撃する人に警察がなにもできない世

界ではなく、マララのように勇気をもって正しい方法で自分の主張をする世界こそ平和だと感じました。

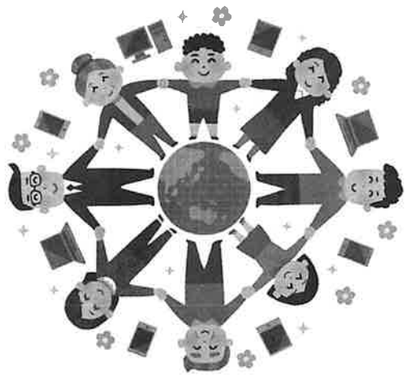
私はこの本を読んだとき、自分たちの学年を思いました。私たちの学年には、「警察」と「武器をもって撃つ人」がいます。武器を持っている人たちに対して何もできない悔しさと不安、でもどうにかしてこの状況を変えたいという希望があります。小さな決まり事でも守り続け、決まりの上で自分たちの好きなことをすることが、「真の自由」だと思います。わがままや自分勝手が通る世界ではなく、正しいことが認められる世界を身の回りにつくっていきたいです。

また、私はこの本から、パキスタンとロシア、ウクライナ、日本は共通点が多くあることに気づきました。マララが銃撃された時代にパキスタンの会話でよく使われていた言葉が、軍、ミサイル、大ほう、ヘリコプターなどです。この言葉は、ウクライナ、ロシアの戦争のニュースでもよく聞きます。また、パキスタンの元首相は銃撃され、日本でも今年同じような事件が起こりました。

マララのように国を変えて救おうという大きなことはできませんが、まずは自分の周りから変えていきたいと思います。性別や家族のことで勉強させてもらえない、自由に発言できない世界ではなく、自由に発言でき、選択できる世界であってほしいと思います。

信念をもって行動したマララのように、私も人の役にたつ仕事がしたいと考えています。今は学校の先生か調理師になりたいという夢があります。どんな人にも安心感や希望を与えられる人になりたいと思います。

私はこの本から本当の「正義」を学びました。これからは、自分のことだけでなく、周りにも目を向け、大切にしていきたいです。まずは、自分の周りから変えていき、それを広げていきたいです。そのためにも、仲間をつくり、一緒に正しい世界をつくっていこうと思います。すぐに変化はなくても、一歩ずつ歩んでいきたいです。



中学校の部

中学校の部　最優秀賞

命のリレー

門川中学校　一年　橋口　空翔

僕は驚いた。五才の女の子が、みそ汁を作る？ダシをきちんと取った、本格的なみそ汁を？

そのきっかけは、はなちゃんのお母さんの「ガン」という病気だった。この環境の違いは何だろう？僕だったらどうしただろうか。色々なことが頭を駆けめぐった。「がん」この言葉を聞いて、想像するのは「恐」「悔」「苦」「怖」そして「死」だ。どれも悲しい言葉ばかりだ。でも僕は、この本を読んで、がんという病気に対する印象が少し変わってきた。人を強くすることも、そして周りの人までも、強くすることもできると。

僕が、この本を読んだきっかけは、知り合いに大きな病気が見つかったことだった。この日の衝撃は今でも覚えている。当時、僕は小学二年生だった。あの日、母から「病気が見つかって大学病院に入院して手術するって。」と聞いた時、頭の中が真っ白になり、八才の僕でも怖い病気だと認識できた。お見舞いに行った日は、具合が悪く顔を見ることが出来なかった。その帰りに僕は「ねえ、絶対に大丈夫だよね？元気になって帰って来るよね？」と母に聞いたそうだ。その後、彼は退院することができた。

この本は、お父さんの信吾さん、お母さんの千恵さん、そして娘のはなちゃんのお話である。この家族は、愛にあふれていて、本当に強い絆で結ばれている家族だ。千恵さんはがんと闘いながら、はなちゃんのために何をしてあげれるのだろうと考え、「私がいなくなっても、料理ができる旦那なら安心です。なぜなら、ご飯を作ることは、生きることと直結しているからです。娘にも、包丁を持たせ、家事を教えます。勉強は二の次でいい。健康で、生きるのが身についていれば、将来どこに行っても、何をしても生きていける。」と一文が書かれていた。僕は心臓がドクンとなった。千恵さんは本当に強いと思った。そして、五才のはなちゃんに「これから朝ご飯は、はなちゃんに作ってもらいますからね。最初はおみそ汁を作ってもらうよ。」と教え始めたのだ。包丁の持ち方から、野菜の栄養のことまで。そして、みそを入れる時、「どれくらい入れるの？」と聞くはなちゃんに、「自分で味をみてごらん。そうしたら分かるから。」と、一切手伝わなかったことに、ぼくは「そのくらい、教えてくれてもいいのに。」と思った。千恵さん三十三才の時、はなちゃんは、たった五才。

ふと僕は、千恵さんの生年月日に、目が止まった。母と同じ年で誕生日も八日違いだと分かると、急に怖くなった。この「がん」という病気は、誰にでも起こりうるということ。僕の母がなるかもしれない。父かもしれない。そんな不安が胸をギュっと締めつけてきた。苦しくて涙も出てきた。そうなった時、この家族みたいに強く生きていけるのかな。辛いし、悲しいと思う。でも僕は、はなちゃんのようになりたい思った。前向きに生きていきたい。

今、コロナで当たり前の生活を送れない日々が続いている。それでも何の不自由もなく生きている。いつ病気になるかは誰にも分からない。家族も友達もみんなそう。「もっと生きたかった。」そう思いながら亡くなる人がいる。悲しんでいる人もいる。僕は今をこの一分一秒を大切に生きたい！と心から思った。もし大切な人が病気になったら、辛い思いを分け合いつつ、その人を大笑いさせたい。両親から授かった、この命を大切に守りながら、僕は生きていこうと思う。

中学校の部　優秀賞

もう一歩、信じる道へ

門川中学校　一年　神戸（こうべ）　月渚（るな）

「信じぬくんだ。たとえひとりになっても」

表紙をめくると真っ先に出てくるこの言葉は、わたしをいつも強い気持ちにさせてくれて、背中を押してくれます。

えんとつ町のプペルという本は、崖に囲まれたえんとつだらけの「えんとつ町」が舞台です。そこかしこから煙が上がるその町は黒い煙に覆われ、住民たちは青い空や星が輝く夜空を知らずに生活しています。ハロウィンの夜、この町に生まれたのがゴミ人間です。ゴミ人間の頭はオンボロ傘で、口からはガスが溢れ、とても汚く、とても臭い、醜い姿をしています。人々からバケモノ扱いされ、ひとりぼっちです。そんなゴミ人間に声をかけたのは、父親を亡くした少年ルビッチ。ルビッチは名前を持たないゴミ人間にプペルと名付けます。ルビッチはなぜか懐かしいにおいのするプペルが大好きで、すぐに仲良くなり二人は友達になります。仲良くなった二人は煙の向こうに星があると信じている話をしたり、父親の写真が入ったペンダントを川に落として無くしてしまったと話をしたり、ルビッチの亡くなった父親は、嬉しいことがあると鼻の下を指でこする癖があったと話しをし一緒に過ごします。そして、二人で星を探しに冒険するというお話です。

みなさんは、どんな思いで友達と一緒にいますか。そして信じていることはありますか。わたしはルビッチの優しさに心を打たれました。汚い、醜い、臭いというだけで誰からも相手にされずひとりぼっちだったプペルに声をかけて一緒にいることにハッとさせられました。そしてなにより、自分の信念を曲げずに信じた道へと進む力に勇気をもらいました。

わたしだったらどうするだろうか。みんなから仲間外れにされている人と仲良くしていたら、今度はわたしも仲間外れにされないだろうかと不安になり声をかけるのもためらってしまうのではないだろうかと思いました。信じていることを信じきる力もわたしには欠けているのかもしれません。わたしは医者になる夢をもっていますが、その夢を必死に追いかけていればいいのに、テストで良くない点数を取ってしまった過程で現実を知り、医者にはなれない、それなりの道を選べばいいのではないだろうかと夢を諦めてしまうようなことがあります。

「しんじぬくんだ。たとえひとりになっても。」

でも、わたしにはこの言葉があります。この本に登場するルビッチとプペルのように、みんなと違うことをする強さ、流されない、悪いことかどうか自分の目でちゃんと判断し行動する勇気、友達を思いやれる優しい気持ちを忘れないようにしたいです。そして、わたし自身の限界をわたしで決めないようにしたいと思いました。

しっかり努力する必要があるのは間違いないですが、諦めずにやり抜くことで道が開けることもあると思うので、さあ、頑張ろうと、読むたびに力が湧いてきます。ところで、プペルから懐かしいにおいがしたり、ルビッチの父親の癖が気になりませんか。この本はハロウィンの夜に隠された真実もあります。ぜひ読んで感動してください。

中学校の部　優良賞

私達の生きる権利

門川中学校　三年　時任（ときとう）　愛菜（あいな）

私は、ラッセル・フリードマンさんの「ちいさな労働者」という本を読みました。

図書館から貸りてきた数冊の本を見る中で一冊の本の表紙に目を奪われたことがきっかけでした。この本の表紙の写真は、ちいさい女の子が工場の中に立っている姿です。まだ、小学四・五年生くらいの子が働いている姿に衝撃を受けました。

この本には、アメリカの不況がどれほど子ども達に悲惨な思いをさせていたかが書かれているとともに、写真家であるルイス・ハインの目がとらえた過酷な労働を何時間もする子ども達の何枚もの写真が載っています。その日常をとらえた写真は、後にアメリカの良心をゆさぶり、「子どもの人権」について考えるきっかけを与えました。

私はこの本を読む中で印象に残っているのは、僅か九歳でこの世を去ったカトリックという少年の話

です。カトリックは炭鉱の事故で亡くなりました。当時九歳だったカトリックを彼の父親がどうしても我が子を働かせたくて、十四歳だと偽り働かせていました。会社側も幼くは見えていましたが、父親が契約書にサインをした以上特に気にかけず、問題は無いと雇用したそうです。無理な労働を続けた結果、カトリックの悲惨な死につながりました。子どもを守る制度が整っていれば、カトリックは亡くならずに済んだのかもしれません。ですが、昔のアメリカには児童の労働を制限する法律があっても取り締りがゆるやかだったり、それほど厳しいものではなかったり子ども達を搾取から守る常識となる基準がありませんでした。そのせいでカトリックのように、苦しい目にあっている子どもが山のようにいました。

本を読み進めると、さらに悲惨な状況だったことが分かりました。街で働く子どもの多くが貧しく、学校にも行けず、住む家もありません。今を生きるために働かざるをえない状況がそこにはありました。正規の労働者として働く十六歳未満の子ども達は２００万人もいたそうです。その多くは、労働環境が過酷で不健全な上、週に六日、一日に十二時間以上働かされていました。ですが、貰える賃金はほんの少しです。

本来ならば、学校や幼稚園に通い楽しく過ごしているはずの子ども達が、ひどい環境の中で働かされていることは昔のアメリカでは当たり前のことでした。私はこの事実を知って、今の日本がどれほど恵まれ、子どもを大切にしているのかを知りました。今の日本には、子どもを守るために年齢にかかわらず、すべての子どもが平等に大人と同じ人間として扱われ、主体的に生きる権利を持つ存在と定められています。

しかし法律がある日本でも、虐待やいじめ、ヤングケアラー、貧困など様々な問題が数多くあります。この問題を解決するために私達ができることは、まず、現実を知ることだと思います。現状を知り、問題解決に向けて自分達ができることを話し合い、ボランティア活動や行政に働きかけることが必要だと思います。学生だからと現実から目をそむけることなく、どんなに小さな事でもできる事からはじめたいとこの本を読んで感じました。

私はこの本を読んで、今過ごしている日々が当たり前ではないことを改めて理解しました。現在でもアメリカだけでなく、世界各地で生きるために働いている子ども達は一億から二億人といます。最近ではウクライナの侵攻の影響によって、日常生活が送れず、学ぶことさえできない子ども達がいます。同じ過ちをくり返していることに誰もが気づき、子どもの権利を守れる社会になってほしいと強く感じました。

中学校の部　優良賞

心が変われば行動が変わる

門川中学校　一年　牧田（まきた）　栞（かんな）

「世界で一番強い国」と聞いたらどんな国を思い浮かべますか。私は、ミサイルや核兵器を持つ国、財力のある国や自給自足率の高い国を想像します。

この物語で心に残った場面は、多くの兵隊や大砲などの武器を持っている大きな国が、兵隊や武器を持たない心優しい小さな国に乗り込んでいく場面です。戦争を起こし、勝利することで小さな国を征服しようとしたのです。しかし、小さな国は、私の想像と違い、戦争をするどころか大きな国の大統領を客のように歓迎し、立派な家を与えました。大統領は驚くばかり。大きな国の大統領は、戦争のないおだやかなくらしを体験するうち、心を動かされ、戦わずに仲間になるという考えに変わりました。私は、この物語を読んで、強い国とは、武力を使うことなく相手の心を動かす力をもった国だと気づきました。そして、人は心が変われば、行動が変わるということも理解でき

ました。そこで、私にもそういうことがなかったか、自分を振り返ると二つほど頭に浮かびました。

まず、小学五年生のときの話です。友達に誘われて、私は朝のボランティア活動に参加しました。花壇の草抜きをしたり校門周辺を掃いたりしました。

活動を終えた時、私は、作業後の学校を見渡し心もきれいになった気がしました。さらに、その日一日、すがすがしい気持ちで過ごしたのを覚えています。

先生や友達から、「いつもありがとう。おかげで、学校がどんどんきれいになっていくよ。」と感謝の言葉を伝えられ、私は、その言葉がうれしくて、ボランティアを毎日続けたいと思うようになりました。三人で始めた朝のボランティア活動でしたが、日に日に人が増えて、クラスの友達やとなりのクラスの友達も参加し、五年生全員ですることが日課になっていきました。最初に誘ってくれたあの友達がいなければ、私は率先してボランティアに参加する考えはなかったし、やり切った後のさわやかな気持ちを体験することはできませんでした。

もう一つは、中学校の部活動での出来事です。音楽に興味があった私は、吹奏楽部の部活体験へ行きました。そこでは、初日から先輩が優しく教えてくれ、

すぐに入部を決めました。楽譜が読めずあせっている私につきっきりで楽譜の読み方を教えてくれるなど、先輩たちは困ったときすぐに助けてくれる存在になりました。そして、入部して三か月後の県の吹奏楽コンクール。行きのバスの中で緊張していると、となりに座った先輩がたわいない会話をしてくれ、緊張をほぐしてくれました。先輩の気づかいがうれしくて、この時初めて私は、先輩たちのために「絶対金賞をとろう」と強く思いました。本番直前。深く深呼吸をし、指揮者を見つめ、演奏を始めました。結果は「金賞」。私たちがずっと目指していた結果でした。この時の胸の高鳴りは一生忘れません。

私が吹奏楽に一生懸命になれたのは、顧問の先生や先輩方が私たちに真剣に向き合って指導してくださったおかげです。

本当に自分の心が納得できたときに、人の行動は変わる、私はそう思います。せかいでいちばんつよい国という本を読んで、私にもそのようなきっかけがあったことに気づきました。今の私は、ボランティア活動にも興味があり、吹奏楽の活動に生きがいを感じています。私に行動を変えるきっかけをくれた人達に心から感謝しています。

読書感想文コンクール　佳作受賞者

小学校低学年の部

五十鈴小学校	二年	本田　奈心美
門川小学校	一年	岡村　星乃未

小学校中学年の部

草川小学校	四年	田吹　莉央
五十鈴小学校	四年	横山　ゆめ

小学校高学年の部

草川小学校	六年	桑俣　愛優
五十鈴小学校	六年	山内　心結

中学校の部

門川中学校	二年	黒木　亜煌
門川中学校	一年	佐藤　菜央

読書感想文コンクール　審査委員

審査委員長

門川小学校

校長　荒武　譲　先生

審査委員

門川小学校	堀	俊太郎　先生
草川小学校	深江	幹代　先生
五十鈴小学校	成合	雪香　先生
門川中学校	佐藤	綾　先生
門川中学校	濱下	真紀　先生

あとがき

令和四年度門川町立小・中学校児童生徒第四十回読書感想文コンクールにたくさんのみなさんが応募してくれました。

作品応募総数は、一〇八四点（小学校六百十三点、中学校四百七十一点）で、門川町内の子ども達の読書感想文に対する関心の高さに驚くとともに大変うれしく思いました。

そのうち各学校での一次審査を経て集まった作品が四十四点（小学校三十二点、中学校十二点）で二次審査を実施し、小学校低・中・高学年の部と中学校の部の四部門から、それぞれ、最優秀賞一点、優秀賞一点、優良賞二点、佳作二点を選考させていただきました。

読書感想文の書き方のポイントとしてよく言われるのが、「批評ではなく感想が書かれているか」「登場人物の心情を想像できているか」「本を読んだことで成長した自分が書かれているか」というのがありますが、今回、二次審査に進んだ作品の多くは、それぞれのポイントがしっかり押さえられた力作ばかりで、審査にあたられた先生方も審査に大変苦労されておりました。

そこで、今回、審査にあたられた先生方の感想をいくつか紹介しますので、今後の参考にしてみてください。

小学生の作品には、「自分の考えを本の内容とうまくつなげている子がいた。」「低学年は、生き物や家族のことなどに目を向け自分の気持ちを素直に表現する作品が多かった。」「子ども達の素直な表現、思いがつづってある作品が多かった。大人では気づかないような読みの視点、子どもらしい光る表現は、読んでいて楽しく、読みごたえもあった。」などの感想が、中学生の作品については、「喜怒哀楽などの気持ちをうれしいではなく、どう表現すれば人を惹きつける文になるか力をつけさせたい。」「作品の書き方のパターンが決まっていて、自分なりの表現がもう少しできるとよいと思います。」などの感想がありました。

門川町では、読書活動の推進を重点の施策として、「門川町の子どもたちに読ませたい図書百冊Ⅰ・Ⅱ」を選定し、各学校に配置してあります。選書に迷った時にはぜひ活用してください。現在読書離れが大きな社会問題となっておりますが、本町の児童・生徒には様々な本に触れてもらい、心豊かに成長してくれることを心から願っております。来年も今回以上のたくさんの読書感想文が応募されることを期待いたします。

令和四年十月

審査委員長　門川町立門川小学校　校長　荒武　譲